

2020年(令和2年)の初めに当たり、今年1年の目標をあれこれ考えました。課題の一つは、名古屋モーツァルト協会の会長を務めながら、モーツァルト(1756~1791)についてまだまだ不勉強であることです。忙しさにまかして、不勉強なこの6年を思い返すとき、モーツァルトの全作品を聴いてみるからこそ、自分にとって一番の意味のある事ではないかと思ひ至りました。周りには四国などお遍路巡礼に旅立つ人たちも多いのですが、そちら方面には、まったく関心のない私には、モーツァルトの巡礼に旅立つからこそ、今年目標にふさわしく思えてきたのです。

幸いにも、この数年モーツァルト大全集なる格安のCDセットが発売されています。私が昨年末に手に入れたものは170枚組で1万円ちょっとでした。ライナーノーツなどは、ほとんどないのですが、よく調べれば、発売元のHPにPDFデータとして手に入れることができました。また、年代順の作品目録もやはりネットで検索すれば簡単に手に入ります。



そんなわけで、1月初めからモーツァルトの音楽行脚を始めることにしたのです。具体的には、年代順目録をもとに、CD全集のトラックリストから該当曲の入ったCDを探し出して、実際に耳を傾けるという旅なのですが。果たして、順調に進むか不安もありますが、あれこれ思いめぐらすよりはまずはスタート。

ところが、わが敬愛するモーツァルト様は、一筋縄ではいかないようで、少し調べようと書物を探すと、これが、数えきれないほどの宝の山なのです。古くは、小林秀雄「モーツァルト」(これについては本年7月の都築正道顧問の講演会で取り上げられます)をはじめ、アルフレート・アインシュタイン「モーツァルト その人間と作品」から始まって、「モーツァルトの暗殺」などの関連本までを含めると、私の周りだけで50冊余の資料がそろいました。(左の本棚の写真・本の明細は

<http://blog.livedoor.jp/fwgi4837/archives/2020-02-29.html> を参照してください)

かたや、今年は楽聖ベートーヴェン生誕250年とあって、関連するコンサートなどが目白押しです。ある雑誌など3号連続でベートーヴェン特集を組んでいましたので、こちらのほうも気にかかります。

さらには、コロナウィルス騒動で、イベントの中止が相次いできており、3月以降のコンサート(特に来



日予定の演奏家)の開催は、開催中止・延期が相次ぐ状況となってきました(2月29日現在)。こちらは暖かくなれば収拾すると思っているのですが、4月10日開催の当会主催コンサートについても、演奏家の来日中止という最悪の事態への対応も考えねばならない状況です。

そんな悪条件の中で、いつ終わるかもわからぬ、モーツァルト巡礼の旅へと出かけることにいたします。

K1(K.番号の“.”はすべて省略します)は1761年モーツァルト5歳の時に作曲されたクラヴィアのための小品6曲(クラヴィコードで演奏されています)で合計演奏時間5分弱のあっという間に終わってしまう。しかし侮るなかれ、初めと終わりのK1aとK1fとを較べるとその差は歴然、著しい成長を感じ取ることができるのです。

K2、K3、K4、K5、K5aも1762年に作曲したクラヴィアのための小品が続きます。この年(6歳)1月から2月に初めてザルツブルグを離れミュンヘンに父と姉とともに滞在し、9月には一家でウィーンに3か月ほど滞在したのです。

翌1763年6月(7歳)から父レオポルドと姉ナンネルの3人でミュンヘン、アウグスブルク、ウルム、シュベチンゲン、ハイデルベルク、マンハイム、マインツ、フランクフルト、コブレンツ、ボン、ケルン、アーヘン、リエージュ、ブリュッセルを経て11月にはパリに到着するという大旅行が始まります。年末にはヴェルサイユも訪れ、翌1764年1月(8歳)にはパリに戻り、4月にはロンドンへと渡ります。翌年7月(9歳)にはロンドンからオランダに向かい、各地を転々として、10月にはハーグへ到着しますが、姉がチブスにかかり、さらにモーツァルト自身も重病を患い、年末にようやく回復します。1766年(10歳)には、阿姆斯特ダム、ハーグ、再びパリ、ヴェルサイユ、そして夏には、ディジョン、リヨン、ジュネーヴ、9月か

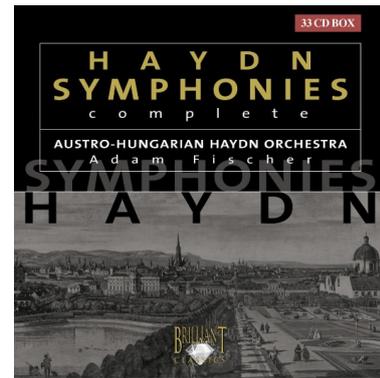
らは ローザンヌ、チューリヒ、ドナウエッシンゲン、アウグスブルク、ミュンヘンを経て 11 月 29 日に 4 年近い大旅行を終えて、故郷ザルツブルグへ帰郷します。

K6, K7, K8, K9 は、いずれもヴァイオリンソナタで、ヴァイオリンのオブリガート付きクラヴィアソナタと呼ばれることもあります。(ヴァイオリンソナタ第 1~4 番)いずれも完成したのは 1764 年 1 月に最初のパリ滞在時です。3 楽章(K6 は 4 楽章)の立派なものです。8 歳という年齢を考えると、本当?と思うほど、聴くに堪える作品です。

K10~15 の 6 曲は、1964 年(8 歳)のロンドン滞在中に作曲されたヴァイオリンまたはフルート(任意にチェロ)声部のついた英王妃シャーロットに献呈されたクラヴィアソナタです。(ヴァイオリンソナタ第 5~10 番) 手持ちの CD ではフルートソナタ(チェロもついて)として、収録されています。実際に聞いてみると、K10, K12, 13 はピアノフォルテ、K11, K14, K15 はハーブシコード、さらに K11, K12, K15 ではチェロも加わっておりました。残念ながらライナーノートには、その編成についての解説はなく、2 楽章からなるイタリアの古い形式で書かれたのが K11, K12, K15 で、残りの 3 曲は J. C. バッハのスタイルの 3 楽章で書かれています。実際に聞いてみても、モーツァルトの作品といわれなければ、バロック時代の作曲家の作品と思うのではないのでしょうか。まだまだ、吸収して、それを咀嚼する段階なのでしょう。なんといっても 8 歳ですからね。

K15 の後に K15a~K15ss 「ロンドン小曲集」という 42 の小品が続きますが、手持ちの CD では、15a, 15m, 15ii の 3 曲が収録されているだけで、15a はオルガン、15m と 15ii はクラヴィコードによる演奏です。

そして最初の交響曲第 1 番変ホ長調 K16 が作られるのです。1764 年 12 月か翌 1965 年 1 月のロンドン滞在中に作曲されたといわれるので、モーツァルト 8 歳の作品です。ロンドンでヨハン・クリスティアン・バッハの影響を受けたイタリア風交響曲で、急・緩・急の 3 楽章からなります。作曲家別・名曲解説・ライブラリー「モーツァルト」I・II の中で、最初に取り上げられているのがこの曲です。オーボエ 2、ホルン 2 に弦楽器群が加わるという小さな編成でもあります。演奏時間も 3 つの楽章合わせて 12 分程度です。



次に収録されているのは交響曲第 4 番ニ長調 K19 で、K17, 18 は収録されておらず、手持ちの曲目集にも記載されておりません。さらに K19a のシンフォニアで、いずれも緩・急・緩の 3 楽章の総時間 10 分前後の作品です。なお、交響曲第 2, 3 番はモーツァルトの作品ではないことが判明しているため、番号が飛ぶという結果になったようです。

K20 はモテット「神はわれらの避け所」という、テノールによるコンサートアリア。K21 は、短い宗教的マドリガル「怒りにかられて去れ」という声楽曲と、初めて声楽曲が作られています。ここまでがロンドン滞在中に作られたもので、続く K22~32 までは 1965 年末から 1966 年 3 月までのハーグ、アムステルダム滞在中に作曲されています。

K22 は交響曲第 5 番変ロ長調で、これも緩・急・緩の 3 楽章ながら 7 分くらいの短い曲です。

閑話休題 ケツヘル番号について: 1862 年にケツヘルが完成したモーツァルト作品目録初版の番号で、通常は頭に「K.」を付けて表記します。その後の研究の進展により、モーツァルト本人の作ではないことが明らかになったものがあり(例えば前記 K17 交響曲第 2 番や K18 交響曲第 3 番)、あるいは新たに発見された作品もあって(例えば K15a~K15ss)、あるいは作曲年月が違っているなど、現在のモーツァルト作品目録は第 8 版(1983 年)にまで進化しています。

モーツァルトの交響曲は全 41 曲(K 初版では)なのに対して、モーツァルトも教えを請い、また、素晴らしい弦楽四重奏曲(第 14 番~第 19 番)6 曲を献呈した、ヨーゼフ・ハイドンには、104 曲もの交響曲があります。果たして初期の作品はどんなものだったのであろうかと、モーツァルトの初期の交響曲を聴きながら思いを巡らしました。そこで、ハイドンの交響曲全集で検索すると、出てくるのです。巡礼の途中に、少し脱線して、最近その 33 枚組の全集をそのお値打ちさに思わず購入しました。(アダム・フィッシャー指揮: オーストリア・ハンガリー・ハイドン・オーケストラ、オーストリア・アイゼンシュタット・エステルハーゼ宮殿ハイドンザールにて、1987~2001 にかけて録音) オーケストラは、ライナーノーツによれば、30 歳から 45 歳までのウィーン・フィル、ウィーン交響楽団、ハンガリー国立交響楽団の選りすぐりの奏者を集めて編成したもので、それを知っただけで、演奏に期待が高まります。まだ、ハイドンがこの 104 曲を何歳から作曲したのかを調べていないのですが、最初の 2 枚を聴いただけで、びっくりします。モーツァルトの初期作品よりも完成度が高いのです(あくまでも素人の感想です)。特に第 6 番では序奏の弦楽器の表情豊かなことから、アレグロのととてもさわやかな進行に圧倒され、またまた素晴らしい音楽の世界を発見しました。モーツァルト巡礼からは脱線してしまいましたが、これこそ好き勝手に生きることのできる現在の隠居おやじの特

権でしょう。

少しだけですが、モーツァルト紀行についても触れておきたいことが出てきました。手元の全5巻の「モーツァルトの旅」(音楽之友社 1991~1992 刊)によれば、モーツァルトはその短い一生の間にドイツ・フランス・イギリス・イタリアなどヨーロッパの各地を長期間にわたって旅をつづけたのですが、どうも各地の観光には興味がないようで、音楽にも表わされていないような気がしてなりません。それが時代なのかもしれませんが、例えばゲーテが「イタリア紀行」で、文章で表わしたように、音楽で表現できなかったものでしょうか？ あるいは、音楽以外にはモーツァルトが興味を示すものが無かったのでしょうか？

こんな調子で、脱線しながらモーツァルト巡礼を始めましたが、いったいどのように進むのでしょうか？ 期待と不安が相半ばしますが、こんな旅を続けられる幸せを噛みしめながら、あれこれ思いめぐらしていきたいと思います。

